

英語教育

ENGLISH CLASSWORK

Vol. 60 No. 1 2008

主幹 佐野 正之

巻頭言

競争しなくて世界一？

横浜国立大学名誉教授 ● 佐野 正之

昨年12月に、第3回目の国際学力テストPISAの結果が発表されました。残念ながら日本は回を重ねるごとに成績を下げ、前回大きく順位を下げた「読解力」も上昇の気配がありません。そんななかで、全教科で常にトップクラスにあるフィンランドの教育が注目されています。しかも、この結果は競争ではなく、生徒の主体性を重視したグループ学習によって生み出されたと言われているのです。成功の秘密はどこにあるのでしょうか。

最大の要因は、教員の資質にあるようです。まず、教師の社会的な評価が高く、高校生の憧れの職業No.1です。給与は特に高いわけではないのですが、生徒に信頼され、創造的に授業を展開できる教師は「やりがいのある仕事」として認識されているのです。また、教員になるまでにもいくつかのハードルがあり、その都度、能力と意欲が試されるのです。

第2の理由は、フィンランドでは学校でも教員養成でも「社会構成主義」の発想が徹底していることです。これは、教育とは知識を与えるのではなく、協同作業で習得した内容を既存の知識と結びつけて再構成し、現実の社会で使える能力に変えていくことだという発想です。ですからフィンランドは、日本が「ゆとりの時間」で目指した「生きる力の育成」を全教科で徹底し、また、そのための教員養成に全力を注いだのです。

英語教育と関連の深い「読解力」で言えば、フィンランドでは書かれた内容を正確に読み取るばかりでなく、自分の言葉で要約し、その内容や表現方法について評価する活動が含まれます。たとえば、手紙文を読んだら要約を書き、内容への賛否ばかりでなく、表現のよしあしも論ずる能力を持って初めて、「読解力」と見なすということです。

日本では英語教育はもちろん、国語教育でもここまで徹底して主体的な読みを求めることはしません。しかし、これからの国際社会で生きるための英語力を考えるとき、こうした視点は無視できません。フィンランドの教育に学ぶべきことがたくさんありそうです。

環境作りとやる気の喚起・保持

千葉大学准教授 西垣 知佳子



1. はじめに

英語学習に成功するか否かは、生徒にやる気が備わっているかどうかにかかっています。どんなに素晴らしい教材があっても、生徒のやる気が希薄であれば、英語運用能力は育ちません。

膨大な時間を要する英語習得の道のりを一步一步進むには、やる気を引き出し、維持することが不可欠です。しかし、やる気の高い状態は安定して継続するわけではなく、初めは目を輝かせていた生徒が徐々にやる気を失っていくことは珍しくありません。教師はこれに対処するために何をすればよいのでしょうか。

2. 3つの動機づけ

やる気は時間の経過、課題の種類など様々な要因によって変化します。竹蓋(1989)は、指導の過程で異なる働きをする動機づけを「短期的動機づけ」「中期的動機づけ」「長期的動機づけ」に分類しています。やる気を喚起・保持させるには、これら3つを組み合わせ活用します。

・短期的動機づけ

子どもに与える新しいおもちゃに似ています。目新しさで関心を引き、「おもしろそうだ」と思わせて学習に引き込みます。しかし飽きると見向きもされず、すぐに消失します。

・中期的動機づけ

成功感や達成感に訴えて「やればできる」と自信を持たせ、「もっとやってみよう」という気にさせます。短期的動機づけよりも長続きします。

・長期的動機づけ

「どうしても必要だ」という必要感に訴えます。困難なことをやり遂げる強固なやる気です。日常生活に英語を必要としない日本では、与えるのが難しい動機づけです。

3. 4月：やる気を引き出す環境作り

新学期である4月には、以上の動機づけに加えて、Dörnyei(2001)が指摘するように、学習する以前に必要な環境整備があります。すなわち、授業に積極的に取り組ませるための英語学習の条件整備です。

(1) 人間関係作り

やる気を引き出す環境作りに重要です。教師が生徒に対して貢献的で受容的であると感じさせ、楽しく協力的なクラスの雰囲気を作ります。また、「先生についてこい。英語力が身につくぞ!」と、教師の熱意を伝えることも大切です。「この先生なら英語力は伸びる」と生徒に暗示をかけることもまんざら悪くはありません。

(2) 実態の把握

英語の好き・嫌い、学習歴、海外経験、授業への要望、やってみたいことなどを調査します。中1では、授業を計画するうえで小学校での英語経験を確認することは不可欠です。また、私は、これまでに受けた英語の授業の中でよかったと思う授業についても生徒に記述させています。授業の連続性を図り、私自身の授業を振り返るためにも、有益な情報となっています。さらに、この結果をプリントにして配れば、クラスの考えを共有しながら授業を進められます。

(3) 不安を取り除く

生徒は「授業についていけるかな」と不安を抱いて新学期の授業に臨んでいます。不安を取り除くために、最初の授業では、毎時間の授業の流れを説明し、授業の縮約版を体験してもらいます。体験を通して、この授業は参加する授業であるという意識づけを行います。

さらに授業に合った家庭学習の方法を説明します。先輩のノートや単語帳を見本として示すと、具体的に何をどのようにすればよいのかわかりやすくなるでしょう。

4. 授業における短期的動機づけ

4月にはやる気を引き出す環境を整えながら、前述の3つの動機づけを組み合わせ授業をスタートさせます。まず次のような工夫から始めます。

(1) 教材の内容

「やってみたい」と思わせるために、生徒の興味、関心、知的レベルに合致したもの、身近なもの、心を打つものを教材に選びます。

(2) 教材の種類

映画、ドラマ、アニメなどの映像や歌は、英語の苦手な生徒でも興味を持ちやすく有効です。また、漫画、スポーツ記事、星占い、広告、パンフレット、カタログ、メニュー、レシピ、説明書など、身近な実物を教材にすると使える英語を実感させることができます。

5. 授業における中期的動機づけ

短期的動機づけで引き出されたやる気が消失する前に、中期的動機づけによってやる気を保持させます。

(1) ほめる

上手にできたらほめ、一生懸命やれば上手になることを体験させて自信を持たせます。

(2) 成就感を育てる

具体的に到達可能な短期的目標を示して、達成感を味わえる活動に取り組ませ、「ここまでできた」と成就感を与えます。

(3) 活動目標の提示

授業中の活動について「なぜこの活動を行うのか」「どのような力がつくのか」、活動の意図を示して、自らの英語学習のプロセスを計画させ、モニターさせます。

(4) 評価

せっかくやる気になっても、テストで良い点数が取れなければ、失望して、やる気は削がれます。授業内容を逸脱したり、レベルが高すぎるようなテストはしないようにします。

6. 授業における長期的動機づけ

短期的動機づけでやる気を引き出し、中期的動機づけで保持させ、長期的動機づけによって目標達成を目指します。

(1) 英語の有用性

英語圏以外の人々とのコミュニケーションも英語を通して可能になることなど、国際語としての英語の高い有用性を実感させます。

(2) 生徒のあこがれ

教師は英語使用者のモデルです。生徒の「あこがれ」の存在となれば、「先生のようにになりたい」と常に生徒に刺激を与え続けられます。

(3) 到達目標の提示

学年の到達目標を示し、学年末に「こんなことができるようになる」ということを明らかにします。先輩の作品や活動の様子をビデオで紹介すると目標が具体的になります。

(4) 評価法の説明

評価テストは指導目標や指導内容を反映することを告げ、過去の問題を具体例として紹介します。授業への積極的参加を促すために、評価には、定期試験だけでなく、授業への参加度、発表、提出物、小テストなど全てを反映させることを伝え、成績に占める割合も示します。

7. まとめ

英語習得には長い時間がかかります。私は、指導の最終目標を「自立した英語学習者の育成」ととらえています。教室の外でも、学校を卒業しても、自ら設定した到達目標を目指して、自力で英語学習を続けられる学習者を育てるには、生徒のやる気を喚起・保持させ、積極的に英語学習に向かわせることがその第一歩と考えます。

参考文献

Dörnyei, Z.(2001) *Motivational Strategies in the Language Classroom*, Cambridge University Press.
竹蓋幸生(1989)『ヒアリングの指導システム』研究社

中1 3年間の見通しを持って

福岡県福岡市立博多中学校教諭 長谷川 愛



1. はじめに

本校は1小1中の校区で、小・中連携が行いやすい状況にある。昨年度は6年生に計3時間の英語活動を行った。今年度は博多小学校の先生と共にカリキュラム作成を行い、5、6年生を対象に、週1回小学校の先生とTTで英語活動を実施している。

英語活動を経験してきた生徒に対して、中学校でどのような授業を組み立てれば、楽しく英語を学べるかを、今後さらに考えていきたい。

2. 生徒の状況把握

(1) 小・中連携

小学校の先生と交流会を持ち、小学校ではどんなカリキュラムで英語活動を行ってきたかを把握する必要がある。中学校が英語教育のスタートではなくなってきたため、中学校で教える内容を学習していることも考えられる。小学校の先生にも、中学校での学習内容を知ったうえで、英語活動を行ってもらうことが大切である。

(2) 事前アンケートの活用

どの学習でも、学習者のモチベーションは大切である。今までは、中学校入学と同時に始まる英語科学習に対して期待感があつた生徒も多かった。しかし、英語が嫌いになっている状態で入学する生徒もいるかもしれない。英会話教室に通い、意欲満々な生徒もいることだろう。そのような状況を、事前にアンケートで把握しておくことが必要と考える。

3. 学習環境

(1) 英語教室

「英語の勉強をするんだ」という気持ちになる教室環境を作ることが大切である。英語圏の生活文化を感じさせる掲示物を貼り、英語の絵本などを置くだけでも教室の雰囲気は変わる。季節に応じ

た環境作りはその国の生活文化を学ぶことにもつながる。ハロウィーンやクリスマスなどは、関連グッズもそろえやすい。「英語教室に行くのが楽しみ！」と感ずるようになれば、生徒は早めに教室に来るようになり、スムーズに学習を始められる。小学校の教室環境に対して、中学校は殺風景に感じる場所が多いようだ。入学したばかりで不安を感じている新入生にとって、英語教室が意欲を喚起する場所になってくれればと願う。

(2) 学習形態

英語の時間は、英語授業専用の座席で座る。入学したての生徒にそれが当たり前だと感じさせることが、以後の英語の授業に大きな影響を与えている。小学校では、男女が席を並べて座っているが、中学校では一人ひとり机を離して座る形態が多い。一旦、この形態が当たり前になると、ペア学習を行う際、男女で机をつけることはたいへん難しくなる。ペア学習やグループ学習を効果的に行うために、入学してすぐの時期に英語専用の学習形態を作ることは意義がある。

4. 英語科学習のスタート

(1) 目標設定

中学3年間で生徒に身につけさせたい力をしっかり設定すると、各学年で身につけなければならない力が明確になる。また、生徒・保護者にその単元の学習内容と評価の仕方を提示することで、短期の目標を意識させることができる。

(2) 授業開き

学級開きに学級の目標を立てるように、授業開きにも授業の目標を立てることが大切である。3年間あるいは1年間で指導者が生徒に「どのような力を身につけてほしいのか」、「どんなルールを守らなければならないのか」を明確に示し、英語の授業がどのような形で行われていくかを説明する。中学校では、学級担任制から教科担任制に変

わり、9教科それぞれの方法で授業が進む。英語活動と英語科学習の違いを含め、生徒にとって未知の世界である学習内容をわかりやすく提示することは、以後の学習への不安を取り除くことにつながる。

〈英語の学習をする際に大切なこと〉

- ・わからないことは、ペアやグループの相手と助け合って学習を進めていこう。
- ・辞書をたくさん使おう。辞書はみんながわからないところを教えてくれる。家庭学習をするときにも、辞書はみんなの学習を助けてくれることを忘れずに。
- ・先生の指示は英語で行う。「わからない」と簡単にあきらめないで頑張ってみよう。3年生では、全て英語で授業を進める。
- ・1日1ページ学習を進めていこう。

5. 実践を通して～英語活動から英語科学習へ～

(1) 歌の活用

小学校の英語活動で一番驚いたことは、児童が上手に楽しく英語の歌を歌うことだ。博多小学校の5、6年生の英語活動では、毎時間、歌を歌ってから授業を始める。小学校で楽しく歌っている雰囲気を中学校でも取り入れていきたい。

本校でも、毎時間授業開始の前から「今月の歌」を流している。英語教室に入ってきたら英語の歌が流れている。それだけでも英語を学習する雰囲気作りになる。4月に入学してくる新入生には、英語活動と同じ雰囲気で、英語の歌を楽しく歌うことから授業を始めたい。歌を活用して、小・中間のギャップをできる限り少なくしたい。

(2) 学習内容

今年度、5、6年生の英語活動ではアルファベットの学習と英語圏の生活文化を知る学習を行っている。小学校で音声を通してアルファベットの学習をしておけば、中学校での文字指導がスムーズに行く。また、英語圏の生活文化については、Body Languageなどを学習している。英語活動のねらいを児童が理解すれば、中学校での学習がスムーズに行えると考えている。

(3) 実践例

新入生は、どの教科の授業も緊張している。た

とえ、小学校の英語活動と一緒に勉強したことがある先生だとしても、場所が変われば不安はあるだろう。また、本校のように1小1中の環境に入ってくる転入生は、なおさらである。その緊張感を取り除くために、次のような手法で最初の授業を行うとよいのではないかと考えた。

①YES, NOクイズ

生徒にYES, NOの2つのプレートを渡す。いくつかの質問に対して、YES, NOのプレートを出して答える。生徒は質問の意味がわかって答える場合もあれば、わからずに答える場合もある。質問は次のようなものである。

〈例〉Do you eat a snake?
Do you have an elephant in your house?

生徒がYES, NOのプレートをあげたところで象やへびの絵などを出す。間違いに対して寛容になるような雰囲気作りに良い。

②コミュニケーションカード

生徒にとってALTとコミュニケーションをとれることは、このうえない喜びであるが、難しいこともある。入学したばかりの生徒の自己紹介は、自分の名前を伝えることで終わってしまう。そこで、生徒に自分の好きなことについて、絵を描かせたり、写真の切り抜きを使わせたりして一枚のカードにまとめさせる。ALTはそのカードを見て質問し、生徒がそれに答えるというコミュニケーション活動を行う。生徒は、ALTになんとか伝えようとジェスチャーを用いたり、辞書を調べたりしながら説明を始める。ALTと最初に打ち解けることができる教材の工夫は大切である。

6. おわりに

今年度、小・中連携で英語活動を行い、地域在住の大学教授や小学校の先生方と英語教育について熱く語る機会を幾度となく持つことができ、改めて中学校での英語科教育の責任を痛感した。小学校で取り組んできた英語活動を活かせるかどうかの責任は重い。中学校だからできることを模索し、わかる授業を心がけ、日々邁進していきたい。

中2 Teachers' Self-Diagnosis

愛知県名古屋市立神丘中学校教諭 野中 圭



1. はじめに

昨年の教育界と言えば、「全国学力・学習状況調査」「教育課程部会におけるこれまでの審議のまとめ」等が公表され、激震が走った。そして平成20年、新しい年が始まり、「新学習指導要領」が告示される。

英語教育界では、新しい時代のスタートになるかもしれない。小学校5、6年生に週1時間、年間35時間、外国語活動が導入される。小学校に英語活動を取り入れ、中学校英語教育にうまくリンクさせることで、日本の学校英語教育全体のレベルを上げるという大きな期待がかかる。しかし、その一方で、中学校の英語嫌いが小学校に前倒しになり、英語嫌いの量産につながらないだろうかといった危惧もある。これらについて、様々な議論が専門家や識者の間でくり広げられている。しかし、なんとと言っても英語を第一線で教える立場にある教師が、英語教育の諸問題に対し、どのように向き合って取り組むかが、最大の鍵であろう。

2. 見落としてはならないもの

「英語は楽しい!」「英語、だ〜い好き!」という声が教室のあちこちで聞かれ、授業中でも英語を読む声が廊下に響きわたるほど、中学入学当初の生徒はキラキラしている。しかし、どうだろう。学年が進むにつれてその輝きは消え、英語に苦手意識を持つ生徒が少しずつ増えているのが実情である。生徒が「苦手意識」を持ち、「英語離れ」が始まり、「英語嫌い」になるといった悪循環が存在する。この厳しい現実から少しでも脱却できるように、日々の授業を改善していかなければならない。ここでは、生徒が「英語嫌い」になる前の段階で、「英語離れ」にならないようにするための教師側の心構えを述べたい。

「英語離れ」を減らすためにはどうすればよいのか。英語を教える者にとって、決して見落として

はならないものとして、「生徒の実態把握」がある。英語を教える者が、どんなに優秀な英語力や経歴の持ち主であっても、また、素晴らしい研究理論があったとしても、これを見落とすと、期待外れの結果に終わってしまう。生徒の実態があつてこそその指導法であり、研究理論なのだ。

私の今までの指導経験を振り返ると、中学2年生の頃から、その「英語離れ」が始まる。次のような理由が一例として推測できる。

- ・ 中学入学当初のように、初めて英語を学習する新鮮さがなくなる。
- ・ 英語の学習内容が難しくなっていくため、授業についていけなくなる。学校や家庭での学習習慣が身につけていない生徒ほど、英語離れは多い。
- ・ 思春期に入り恥じらうことで、英語の4技能のうち、「話す」「読む」活動のような人前で発表することに抑制がかかってしまう。
- ・ 生徒が苦手意識を持ったとき、生徒が解決しようと努力しなかったり、教師がうまくフォローできなくなったりする。

3. Teachers' Self-Diagnosis

私は生徒の実態把握や分析がある程度できたら、自分の指導内容を細かい項目で定期的振り返ることにしている。自己診断で項目ごとにチェックしていくものである。日頃は、校務や生徒指導、部活動指導で多忙な毎日に追われるため、自らを振り返ることはなかなか容易ではない。しかし、この自己診断を行うことで、指導法や教材・教具の開発、改善、工夫などに役立っている。項目内容が確立されたチェック・シートがあれば、短時間で自らを振り返ることも可能である。そして、指導していくなかで、見えなかったものが見えてくることも少なくない。ここでは、そのチェック・シートを紹介したい。

[Teachers' Self-Diagnosis Sheet]		Date / /
CHECK	POINTS	Yes or No
①	生徒に自己評価(例/学習内容を理解できたか)や授業評価(例/授業は楽しいか・分かりやすいか)をさせているか。 ■ 評価の結果はどのようであったか。[例/4段階評価で調査する]	<input type="checkbox"/> Yes <input type="checkbox"/> No
②	生徒の「聞く」活動は十分であったか。 ■ 評価は、どのように行ったか。[例/リスニング Q&A・F 問題等]	<input type="checkbox"/> Yes <input type="checkbox"/> No
③	生徒の「話す」活動は十分であったか。外国人英語指導助手(ALT)などのネイティブ・スピーカーと会話する場面を設けているか。 ■ 評価は、どのように行ったか。[例/教師観察や生徒の発話内容等]	<input type="checkbox"/> Yes <input type="checkbox"/> No
④	生徒の「読む」活動は十分であったか。音読とともに、英字新聞等を利用して読解力を高めるような指導を行っているか。 ■ 評価は、どのように行ったか。[例/生徒の音読の様子等]	<input type="checkbox"/> Yes <input type="checkbox"/> No
⑤	生徒の「書く」活動(Note-taking)は十分であったか。語い力を高めるような指導を行っているか。 ■ 評価は、どのように行ったか。[例/英単語テスト等]	<input type="checkbox"/> Yes <input type="checkbox"/> No
⑥	生徒に興味・関心をひくような、タイムリーな題材(芸能、スポーツ、国際文化)を授業に取り入れているか。 ■ [例/イチロー、Beatles、オリンピック等]	<input type="checkbox"/> Yes <input type="checkbox"/> No
⑦	英語を使ったゲームやクイズ形式を取り入れて、慣れ親しんで楽しんだり、誤りを気にしない雰囲気を作ったりすることを目指した指導をしているか。 ■ [例/Bingo、インタビュー、カード・ゲーム等]	<input type="checkbox"/> Yes <input type="checkbox"/> No
⑧	体験を伴い、コミュニケーション能力を育成できる授業であるか。 ■ [例/道案内、電話での会話、レストランでの会話等]	<input type="checkbox"/> Yes <input type="checkbox"/> No
⑨	授業の中で、生徒をほめているか。 ■ [例/classroom English でほめる、生徒の優秀作品を発表する等]	<input type="checkbox"/> Yes <input type="checkbox"/> No
⑩	語いの方が身につく指導をしているか。 ■ [例/英単語の和訳→英訳、基本文の増記等]	<input type="checkbox"/> Yes <input type="checkbox"/> No
⑪	自己表現の方が身につく指導をしているか。 ■ [例/既習表現を用いて質問して答えさせる等]	<input type="checkbox"/> Yes <input type="checkbox"/> No
⑫	S.P.E. Work を設定した授業展開をしているか。 ※ S=Situation(場面・状況)、P=Purpose(目的)、E=Expression(表現)の三位一体の活動	<input type="checkbox"/> Yes <input type="checkbox"/> No
⑬	高いレベルの英語の問題(入試問題等)にチャレンジさせているか。 ■ [例/時評、入試ではこんな問題があると紹介する等]	<input type="checkbox"/> Yes <input type="checkbox"/> No
⑭	英語の苦手意識を感じ始めた生徒をフォローしているか。 ■ どうフォローしているか。[例/授業外で教えたり課題を与えたりする等]	<input type="checkbox"/> Yes <input type="checkbox"/> No
⑮	定期テストや小テストで、生徒の正答率は満足のいくものであったか。 ■ 正答率が低い問題の分析結果 [例/動動態から受動態への書きかえ等]	<input type="checkbox"/> Yes <input type="checkbox"/> No

4. おわりに

今後、英語教師が担う役割は、ますます重要になるだろう。それは「コミュニケーション能力を高める」という視点を大切にされた小学校英語活動である。そして、中学校では「小学校で学んだ生活に関する語いや慣用表現を、場面・状況に応じて活用させる場面を設定し、英語運用能力を高める」という視点を大切にしていかなければならないと考える。

教育委員会によるサポート体制や先進校などの実態を踏まえたシラバス作り、教員研修システムとその内容の確立が急務である。しかし、前述のように、英語を第一線で教える立場にある教師が、英語教育の諸問題に対し、どのように向き合い取り組んでいくかが、最大の鍵である。これを常に認識し、「英語への苦手意識」「英語離れ」「英語嫌い」をなくせるよう、“Positive Action”を起さねばならない。

中3 生徒の表現意欲を高める Writing指導の工夫

～ My Town Projectを通して～

栃木県宇都宮市立雀宮中学校教諭 田村 岳充



1. 中学生の英語力の抱える問題点

宇都宮市では毎年12月に市教育委員会が独自の「学習内容定着度調査」を実施している。平成18年度における英語の実施結果報告(中学1～3年生)から次のようなことが読み取れる(下線・囲みは筆者による)。

〈観点別正答率〉

理解	79.3%	与えられた条件で英作文する2つの設問の解答結果 正答率 38.7% 42.4% 無答率 26.0% 30.7%
表現	47.4%	
言語	74.8%	

この結果から、他の観点に比べて、「英語を使って自分の思いや考えを表現する(ここでは「書く」)力」が定着していないということが顕著にわかる。

また、英作文において無答の(自己表現をしようとしな)生徒の割合も高く、「英文を積極的に書く」とする態度の育成が課題と言える。

本稿で紹介する実践は、こうした現状を踏まえ、中学3年生を対象に4月の授業で取り組んだものである。

2. 「表現力を伸ばす」前段としての「表現意欲を高める指導」の重要性

中学3年生になると、生徒は受験を意識し、テストで好成績を取めることに熱心になりがちである。しかし、このような意識を持って取り組む学習は一人で問題集などをひたすら解くようなものとなりがちで、彼らが実際に抱えている「表現力の欠如」という問題は解決されにくい。近年、高校の入試問題にも「表現力」を要求する出題が多く見られ、こうした学習では対応しきれない現実がある。

本来、自己表現とは、自分の中に伝えたい思いや考えがあり、コミュニケーションの対象である相手の存在があって初めて成立するものである。だからこそ、授業において生徒の知的好奇心をく

すぐる状況(相手の存在や自己に関連性のあるトピック選定など)を設定することが求められる。

3. 「伝えたくなる」状況設定の重要性

田中(2003)は、生徒の「表現意欲」を高めるポイントとして以下の4点を挙げている。

- ①必然性を高める
- ②具体性を高める
- ③自己関連性を高める
- ④自由度を高める

自己表現をさせる場合には、実際に生徒自身に関わりのありそうな状況を具体的に設定することが大切になる。また、定型表現だけでなく生徒一人ひとりの思いや考えが表現できるような工夫をしていくことが必要である。

4. My Town Project

本校では中学3年生の4月、既習の言語材料を活用して国内外の中学生と「我が街一番のお気に入りの場所」を紹介しあうMy Town Projectという自己表現活動を行っている。これは関東ブロック中学校英語研究大会で、千葉県柏市・中英研の先生方が発表していた実践を大いに参考にしたものである。

単元に入る前には、次のようなガイダンスを行うことにしている。

- ・交流相手と自分が住んでいる街について紹介しあえること
- ・海外の同世代の相手と交流ができること

ガイダンスを終えると、実際にコミュニケーションの相手が存在するという事で生徒の目は輝き、「伝えたい・表現したい」という意欲の高まりを感じることができる。交流校については、筆者が在外教育施設(マニラ日本人学校)派遣経験者であることもあり、海外の日本人学校やインターナショナルスクールにEメールで依頼をしたり、県内外の友人教員のネットワークを活用したりして探している。今年度は、バハレーン日本人学校、

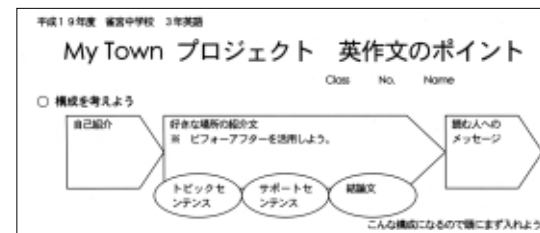
フィリピンのインターナショナルスクールを始め、京都市内、栃木県内の中学校と本校の5校でプロジェクトを行っている(同一市内・県内の学校間でも十分実施可能)。

5. プロジェクトの展開

プロジェクトの展開は以下ようになる。

- ①お気に入りの場所選定とデジカメによる撮影
- ②専用ワークシートへの下書き
- ③教師による添削
- ④パソコン室にて作品の仕上げ(写真貼付)

お気に入りの場所を紹介する英作文の指導に関しては、下のような専用のワークシート(一部抜粋)を配付してヒントを与えている。また、パラグラフ・ライティングの基本となるようなフレームを与え、自分のお気に入りの場所について、そこがどんな場所で、なぜその場所が好きなのかという自分なりの思いや考えを自由に表現できるように導いている。



最後に、生徒がパソコンで完成させた作品(A4判1枚)を、教師がまとめてEメールに添付して交流校に送っている。その後、互いの街の様子を知るための鑑賞会を開いたり、感想を交換したりしている。

6. プロジェクトの効果(生徒の声から)

生徒は活動にたいへん意欲的に取り組んだ。英語があまり好きではない生徒にとっても、このプロジェクトは魅力的な活動だったようである。生徒の反応からも、このプロジェクトによって「表現意欲」を高めることができた実感している。以下、生徒の感想の一部を紹介する。

・最初はやる気が出なかったけど、活動が始まってみると思ったよりおもしろくて、いい作品を作ろうと思いました。

・活動する前は、自分の作品がどんなものになるのか不安でした。でも、今まで授業で学んだことを生かし、先生に助けってもらって無事完成させることができた。交流相手を読んでも、少しでも伝わるといいと思う。

7. 継続的な指導を目指した取り組み

規模は小さいが、このような自己表現活動を各単元の前にできるだけ位置づけて実践している。卒業を控えた中学3年生の学習の最後には「This is the place I like the best in my school.」という自己表現活動を行っている。生徒たちは「自分の学校で一番好きな場所」について関係代名詞を用いて表現する。多くの生徒が3年間の思いを込めた作品を完成させる。この活動も「表現意欲」を高める効果的な指導の一例であると考えている。



「砂漠」バハレーン日本人学校生徒作品



「田圃」本校生徒作品

参考文献

- 田中武夫(2003)『「自己表現活動」を取り入れた英語授業』大修館書店
- 『平成18年度宇都宮市学習内容定着度調査実施結果報告』宇都宮市教育委員会



中高一貫校における英語教育

秋田県秋田市立御所野学院中学校教諭 鎌田 功



1. はじめに

本校は、併設型の中高一貫教育校である。中学校の卒業生のうち約3分の2が併設された高等学校へ進学し、残り3分の1は他校へ進学する。他の中学校からの入学者はいないという全国でも珍しい流出型の一貫校でもある。創立10年に満たない本校であるが、6年間という長期のスパンにわたる英語教育の進め方について、本校のこれまでの取り組みを少し述べてみる。

2. 中高一貫校における英語教育の実践

(1) 中高英語教員の相互乗り入れ

創立時から実践されてきたのは、中高教員の相互乗り入れである。中学3年生と高校1年生の授業で行われている。

過去、中学校教員は高校1年生のオーラル・イングリッシュを担当し、中学校で既習の英文法を再確認しながら授業を進めた。また、高校教員は中学3年生の選択英語授業を担当し、基礎・基本および高校の英語授業の進め方について5～6単位時間(本校の1単位時間は65分)にわたって指導を行った。

現在、中学校教員の高校への乗り入れは行われていない。それに代わるものとして、長期休業中に中学校教員が、高校1年生の定期テスト成績不振者を対象に補習を行っている。高校教員の中学3年生への乗り入れは、方法を変えながらも継続して行われている。

(2) 総合テスト

中高の英語教員共通の課題は、基礎・基本の定着である。もちろん、全国すべての学校でも同様であろう。本校の場合、生徒は選抜学力検査なしで進学するために、中学3年間の総復習、いわゆる受験勉強を経験することがない。そのために高校入学時における生徒間の個々の学力差は、予想以上に大きい。高校の英語教員にとってはそれが悩みの種であり、教科書選定に苦慮し、通常の一

斉指導授業を進めるうえでも大きなネックとなっている。そのため授業時にはホーム・ルーム学級を解体し、習熟度別に編成した少人数指導を行うなどして対応している。

中学校においても、生徒に3年間の学習事項を再確認させる機会を設けるべく、様々な試みが行われている。現在最重要視しているのが、「総合テスト」と呼ばれるものである。3年間の英語学習内容の基礎・基本事項を整理し、系統立てて出題するものであり、リスニングや長文問題もあるが、大部分は穴埋め、書きかえ、英作文、和訳といった、英語にはよくある問題形式である。be動詞、一般動詞に始まり、受動態や現在完了形までを網羅した全体の量は膨大であり、かなり精選しても通常のテストでは収まりきれなくなる。

そこで本校の「総合テスト」は、全教科とも100点満点にこだわらず、1単位時間(65分)内で終了するものを作成することになっている。ある教科は150点満点、別の教科は178点満点という具合に、出題量・内容はその教科に任せられている。共通しているのは、8割以上得点できれば合格、不合格者は合格するまで何回も再テストをする、ということである。それでも合格困難な生徒には授業形式で学習相談を行い、基礎・基本事項定着の徹底を図っている。

3. おわりに

全員が併設高校へ進学するわけではないため、6年間を見通した教育課程を編成するのは難しい状況にある。本校の英語教育においても、ここに記した教員相互乗り入れや総合テスト以外に、定期テスト前の学習相談や、英語検定の中高共同実施等を行っているが、まだまだ試行錯誤の途上にある。今後も他校の実践等を参考にしながら、さらに充実した本校独自の英語教育を模索していきたい。



三ヶ月坊主になった理由

ドイツ フランクフルト日本人国際学校教諭 阿部 和幸



1. はじめに

今回は、私が平成19年4月から勤務するフランクフルト日本人国際学校の様子、および私の語学習得の失敗談を紹介したい。

2. 2限目は3年生で、3限目は3年生

と言っても、中学3年生の授業が2時間続くことではない。今年で教員9年目を迎えたが、小学3年生に英語を教えながら、中学3年生に美術、技術・家庭科を教えることは初めての経験である。派遣される職員数は限られているため、中学英語教師として赴任しても、他教科または小学部を担当する可能性がある。実際に渡独前には図画工作の教材を調べるため、小学校まで足を運んだ。

3. 小学3年生より英語導入

英語教育活動であるが、小学3・4年生が「英会話」として週1時間、小学5・6年生が週2時間、中学生は週6時間(英語4時間、英会話2時間)を行っている。加えて、中学3年生は選択授業で英語を選択すると週7時間授業となる。

英語の授業は通常通り学級単位で実施するが、一学年の人数は約20名。英会話は習熟度別で三つのクラスに分け、Native2名と日本人1名が各クラスを担当、一クラスの人数は10名程度と恵まれた環境である。英語に加え、ドイツ語(習熟度別)を小学1年生から中学3年生まで週2～3時間実施している。

4. 「英語が嫌い」はわずか3名

ドイツでは、英語で日常生活を送るのは困難なことではない。このような生活環境で育っている子どもは英語に対する興味・関心も高い。さらに中学3年生になると、海外子女生として高い英語力を求められ、「英語アレルギー」にかかっている状況ではないというのが本音のようだ。本校の中学生(61名)のアンケート結果によれば、嫌いな教科が英語と答えた者はわずか3名。現在一部の英会話授業は英語のみで行っているが、「難しいがおもしろい」というのが生徒の反応である。

5. 三ヶ月で終わったドイツ語学習

ここからは私の失敗談である。派遣先がドイツと決定したとき、大学時代に2年間ドイツ語を学習した経験から、すぐに習得できると安易に考えていた。4月に着任し、6月からやる気に満ちて語学学校(90分×週2回)に挑んだ。ところがだ。あれほど意気旺盛だったにもかかわらず、「三日坊主」ならぬ「三ヶ月坊主」となってしまった。なぜ「坊主」になったのか、達した結論が3点。

まず、英語で生活でき、ドイツ語の必要性に疑問を感じ始めた。そして、文法中心の授業で、本来の目的である「日常会話のドイツ語習得」にそぐわなかった。最後に、自ら復習することがなく、その場限りの理解に留まり、定着に至らなかった。

失敗続きのドイツ語学習だったが、生徒の立場になるという点で成果はあった。この失敗談をもとに、自分の授業を再検討してみた。

まず、生徒に対して、英語の必要性、なぜ学習するのかという動機づけができていないか。次に、文法に偏らず、日常多頻度の表現(買い物や電話)を授業で扱っているか。最後に、適度な課題やテストの実施により、復習させる機会を提供できているか。

その他、三ヶ月坊主の再認識点は、反復練習は飽きてしまうと考えられがちだが、指示がわかりやすく、口慣らしにもなり、少しずつ定着していくので、継続した反復練習の必要性を感じた。そして特記すべきは、ドイツ語の先生が同じような失敗をくり返す私を叱責せずに、気長につき合ってくれ、大きな励みとなったことである。初級レベルの学習者に対して必要なものは「忍耐力」。

6. おわりに

在外教育施設勤務は概ね3年間が基本だ。日本とはやや異なる教育環境で慣れないことも多いが、残された時間はわずかだ。フランクフルト勤務での貴重な経験を帰国後の授業に反映できるように、取り組んでいきたい。

1. はじめに

新学習指導要領の方向性がほぼ確定された。英語科としてはなんとと言っても、6年ぶりに週当たりの指導時数が全学年4時間に返ることが一番の話題だろう。しかし喜んでばかりもいられない。「4時間に返すからには、増えた1時間でこれまで不足していたことをがっちり指導してくださいよ」という強いメッセージが裏にはあるからだ。その「不足していたこと」とは「文法」と「語い指導」のようだ。そこでこの号では、後者の「語い指導」における強力なツールの一つである辞書指導を取り上げたい。

2. 辞書指導を復活させよう

現行の学習指導要領で、週当たりの指導時数が実質的に1時間減り、先生方が何を削ったかという調査をしたことがある。答えは様々だったが、多くの先生方に共通していたのは「辞書指導」だった。確かに辞書を引かせると、個人差が激しく、時間がかかることこのうえない。しかし、何か大事なことを忘れてはいないだろうか。それは「学習するのは生徒」という当たり前のことだ。学校での週3時間の授業だけで英語が習得できるはずがないことは論をまたない。教室や教師の指導から離れても、生徒が家庭学習できるようにしてやらなくては効果は上がらない。それには辞書指導が必要だ。

3. 辞書指導の基本

辞書指導と書いたが、そんなに大それたことをする必要はない。生徒が「そうか、こう使えばいいのか」と合点するような場面を、授業のどこどこに設定するだけのことだ。辞書の有用性に目覚めた生徒たちは、自分でどんどん辞書を引き始めるようになる。

まずは1年生の1学期。文字を導入したらすぐに辞書指導を始めよう。Lesson 1に出てくる3～4文字の名詞を引かせよう。辞書引き競争の始まりだ。ポイントは4つ。

①辞書を引いたらその単語に赤丸をつけさせる。

学校で引く単語は重要語中の重要語だ。引いたら赤丸をつける癖をつけさせよう。2度、3度引くこともあるが、赤丸がついていれば探しやすい。また勉強した痕跡が一目でわかり、励みになる。第一義の訳でない場合は訳語にも、場合によっては品詞にも赤丸をつけさせる。

②辞書が引いたら生徒を立ち上がらせる。教師はNumber 1, Number 2... と生徒が立ち上がった順番を言う。早く引けた生徒には励みになる。

③立ち上がって一通り辞書の訳語や例文を読んだ生徒には、まだ引けていない生徒の手助けをさせる。その際、ページを教えるのではなく、引き方を教えるように指導する。こうすることで、クラス全体の辞書引き速度が格段に速くなる。

④生徒が辞書を必ず持ってくるまで、毎授業辞書引きの時間を取る。

4. 辞書指導の一例

重要語ほど、自分で発見させて辞書の仕組みを教えると同時に、記憶を強化させることが肝心だ。私は教科書(*NEW CROWN 1* 三省堂)の新語の中で、次の語は授業中に辞書を引かせるようにしている。()内はその理由である。

Lesson 1 right(複数品詞,多義語), from(前置詞)
Lesson 2 then(多義語)
Lesson 3 catch(複数品詞), for(前置詞), know(不規則発音)
Lesson 4 anyとsome(使い分け), how(多義語), look(seeとの意味の違い), take(多義語)

5. どうやって辞書を用意させるか

辞書は中学3年間で使用することとその有用性を保護者に訴えて、全員が用意できるようにしたい。地域の小学校にお願いして、卒業記念品として贈ってもらうのが一番よいだろう。中学3年生には、卒業するときに持っている辞書を学校に寄贈してくれるように頼むのも手だ。

英語教師の役割再考



北海道札幌市立青葉中学校校長 北島 治夫

教師を生業としている我々に求められていることは？ と自問すると、自分が生徒だったときのことを思い出してみるのがその答えの原点であると思われる。つまり、新しいことや知らないことに会い、わかったという喜びであり、意外なことに驚き、言葉の持ついろいろな事実に感動したりしたときのことなどである。現代は、自分がこのような経験をした時代とは、確かに違っている。様々な情報が瞬時に伝わり、海外の風物や習慣などもテレビ等で知る機会も多い。そして海外旅行の経験をしている子どもも結構いる。しかしながら、時代がどうであれ、人間の知的好奇心や意欲を喚起して、やる気を育てるのが大事であることは、古くて新しい課題であり、どの教科でも必要なことである。英語の授業や指導法に関わる実践資料やノウハウの本も多く出版されているが、やはり、授業はマニュアルを超えた人と人との関わり(教師と生徒、生徒同士)であるがゆえに、どう工夫し、食いつかせるかということは永遠の課題であると信じている。そのためには、教師自身が常に英語を学ぶ喜びを感じ、学び続けるとともに、アンテナを高く張っているいろいろなことを吸収していくことが求められていると思う。

現在、私は直接生徒を教えるという立場にはないので残念ではあるが、研究会等での助言では、「『英語が好きだ』という生徒を多くつくろう」という内容で最後を締めくくりにしている。

しかしながら、「英語は必要である」と考えている生徒の数に反比例して、学年を追うごとに「英語が好きだ」という生徒は減少しているという調査結果がある。確かに学習内容は積み上げであり、既習事項をすべて覚えていかねばならないので、そのような生徒が減っていくのは仕方がないというところもできるが、この事実を真摯に受け止

め、どのようにして「好きだ」という生徒の割合を保っていくかという努力も忘れてはならないと思う。というのも、授業がおもしろいと感じたり、先生が好きということからでも、生徒はやる気を起こすものであるからである。

そのためにも、まずは授業に「わかりやすさ」が求められ、習ったことを自分で「使う」ことを通して、基礎的・基本的事項を定着させるのは当然のことである。そして生徒の実態や指導内容に応じて、様々な工夫をこらすことが必要である。さらに、生徒の頑張りを認めてあげることが大事で、それがシールであったり、一言のコメントであったりと、教師によって工夫は様々であるが、生徒にとって自分の努力の「証」をもらう喜びは、いつの時代でも同じである。

また、英語を学ぶ喜びを感じさせる手立てをどう構築していくかということも大事にしていきたい。その例としては、言語の背景にある風物、習慣、歴史、文化等について幅広く調べ、意図的に紹介することがあげられるが、これは生徒に調べさせてもよい。母語である日本語に目を向けさせることも必要であるし、併せて日本語と英語の発想や表現の違いに気づかせることも大事であると思う。こうすることによって、英語に限らず、言語そのものに興味を持たせる一助となるのである。余談の効用もあるが、時間も限られていることから、教科通信という手段を利用するのもその一つである。

「私は英語はあまり得意ではないけれど、先生の授業が好きです」という生徒の言葉に、私はどれだけ励まされたことか。私たち英語教師の役割は、改めて「英語が好きの子をいかに多くつくるか」に尽きると強く思う。



Rule-based approach vs. Exemplar-based approach (前編)

北海道 市立函館高等学校教諭 佐藤 臨太郎

Introduction

Accuracy has traditionally been regarded as the most important aspect in English education in Japan and teachers, in teaching the linguistic rules or grammar, have mainly employed rule-based teaching due to their intolerance of students' errors. In the rule-based grammar teaching, we teachers explain the rules of the target grammatical structures explicitly in Japanese, and then ask students to understand and memorize the rules. They usually present a few example sentences, followed by a short grammar based-quiz. Students learn the grammatical items with awareness of what is being learned. This teaching approach can be effective and efficient in the Japanese EFL learning environment where learners do not have natural exposure to English. Yet some issues can arise. The problems of the rule-based approach are as follows.

1. Teachers tend to believe that once the item is taught students should understand, learn and acquire the rule as they would do so in memorizing a math formula, although as Willis and Willis (2007, p.18) point out "learning is a developmental process which is not subject to the learner's conscious control."
2. In processing input and producing output, learners who have been taught grammar only by this approach, often have to recognize and analyze the rules used in the input or needed in output and then remember the rules they

memorized to apply them, which takes a lot of time hindering fluency.

3. Learners who are not good at analyzing or logic may not prefer this way of learning.
4. Not all grammatical structures can be explained and taught analytically.
5. There is a risk of over-analysis of grammatical rules, which will lead to production that is grammatically correct but linguistically incorrect (Widdowson, 1989), such as "The reason of the bird's migrating is not clear."¹

Exemplar-based approach

Admitting the essentiality and the importance of this rule-based grammar teaching, I would suggest thinking about adding another way of teaching grammar, namely exemplar-based teaching or memory-based teaching. In this approach, teachers provide students with many example sentences that contain the target grammatical structures, without giving them explicit grammatical explanations. Students are not required to analyze to understand the grammatical rule but to learn as chunks being concerned with the accumulation of exemplars (Skehan, 1996). Skehan (1998) states that the system is redundantly structured and can operate mainly on chunks rather than on individual items operated mainly by the rule-based system. However, I strongly believe that, through this exemplar-based learning, learners can learn not only chunks, collocations² or lexical phrases³ but also grammatical rules they have not yet

learned, which reflects the natural way children learn their first language, namely, being exposed to the examples around them. Yet I have to mention two important points. Since learning English as a foreign language is totally different from acquiring our first language, we cannot rely only or mainly on exemplar-based teaching. Rather, this must be a supplement of the rule-based teaching. The second point is that a great amount of exemplars should be provided for students to acquire and learn words, expressions and grammatical structures. Students should be involved in considerable amount of extensive reading and reading-aloud activities in order to internalize them. Teachers themselves also have to give students as much input and as high a quality of input as possible in the form of written material or verbally. The more examples with the grammatical point students see or hear, the easier they will find it to learn and the more instinctive their understanding will become. I should mention that teachers try to be proficient enough to improvise input with the grammatical points verbally anytime and anywhere in the class spontaneously as well as the exemplars prepared in advance. Teachers also are required to be able to adjust the degree of difficulty of their English to various levels according to their students' understanding flexibly. Conducting the class mainly in English in which teachers have many more opportunities for verbal input can be food for thought.

Note

1. This sentence was written by one of my students in a writing class.
2. Collocations refer to a grouping of words accepted as a phrase or clause (Nation, 2001).
3. Lexical phrases are longer strings of language which recur frequently and are often connected with the functional usage of language (Schmitt and Carter, 2000).

References

- Nation, I.S.P. (2001). *Learning Vocabulary in Another Language*. Cambridge University Press.
- Schmitt, N., & Carter, R. (2000). Lexical phrases in language learning. *The Language Teacher*, 24(8), 6-10.
- Skehan, P. (1996). A framework for the implementation of task-based instruction. *Applied Linguistics*, 17, 38-62.
- Skehan, P. (1998). *A Cognitive Approach to Language Learning*. Oxford University Press.
- Widdowson, H. (1989). Knowledge of language and ability for use. *Applied Linguistics*, 10(2), 127-37.
- Willis, D. and J. Willis. (2007). *Doing Task-Based Teaching*. Oxford University Press.

文法回帰

ずいぶん昔のことだが、某県の高校英語教員採用が決まったときに、田舎の母が、こう言った。「よかったね。もう勉強しなくていいね」今でも可笑しさがこみあげてくる母の言葉である。

しかしその言葉とは正反対に、教員になるということは、毎日の授業準備のみならず、様々な仕事と格闘し、勉強し続けるということだった。当時、英語の授業にOral Communicationや外国人教師とのTeam Teachingが導入され始めていた。ほとんどの英語教員が、文法と訳読中心の英語教育しか受けていなかったため、新しい英語授業への取り組みに誰もが四苦八苦していた時代だった。私自身も、深夜まで頑張って準備しても、やはり訳読式に陥ってしまう授業に嫌悪を感じる日々だった。授業法に関して英語だけがバッシングを受けることに理不尽さを覚えながらも、Rivers (1981)やSmith (1985)の文献を読みながら、工夫できる点を模索していたことが思い出される。

ところで、最近知り合った方にS氏がいる。S氏は経営工学の専門家で、国内外での研究発表や講演をすることもあり、辞書を片手にNatureなども読むという立派な知識人である。しかしS氏は、「自分の英語力に関して、何かすっきりしないものがある」と言う。S氏曰く、「英語の基本文法が復習したい」と言うのであるが、そんな話はとうてい信じ難い。しかし、40代後半のS氏は、私立の中学・高校時代に、当時最新のLL教室を駆使したcommunicativeな英語授業を受け続けたらしい。話を聞くにつれ、S氏は、いわゆる「英会話」でお茶を濁すようなコミュニケーション力ではなく、アカデミックな内容にも対応できる堅固な文法力の必要性を感じているのだと理解できた。

S氏の相談を受けながら、昨今言われている「communication重視の英語教育の弊害」という言葉を思い出した。文法・訳読中心の授業は、ずいぶんバッシングを受けてきた。小篠敏明氏は、「コミュニケーションvs.文法」の問題を「終わり

なき戦い」と称した。しかし、『日本語力と英語力』の著者である斎藤兆史氏は、「日本人に一番合う英語習得法として、まず言葉の骨組みを知る文法の学習は、日本人の英語の学び方に合ったものだ」という主張をしている。自分自身の長年の授業経験を通じて、文法知識を道具として活用していくという視点での「文法回帰」が、最近自分の中に起きています。

結局、S氏とは月一回の勉強会を持つことにした。学習ターゲットは、英語の基本文法習得である。しかし、専門家のS氏は学生とは違う。S氏に合った専門的な英語資料を教材に織り交ぜながら、文法とはReadingやListeningをするときの予測力向上のための道具であることを強調していくつもりである。私自身にとっても一つの良い勉強の機会となるだろう。

今度田舎の母と電話で話すことがあったら、「まだまだいっぱい勉強することがあるみたい」と言ってみよう。母は「ふーん。よくわかんないけど、いつも大変だねえ」ときつと言うだろう。

(横浜国立大学准教授 田島 祐規子)

参考文献

Rivers, W. M. (1981) *Teaching Foreign-Language Skills*. Chicago: The University of Chicago Press.

Smith, F. (1985) *Reading Without Nonsense*. New York: Teachers College Press.

小篠敏明「[学力低下]vs.[総合的な学習]vs.[コミュニケーション]」、『英語教育』(2005年5月号, p.17-19)大修館書店
齋藤孝, 斎藤兆史(2005)『日本語力と英語力』(第4版)中公新書ラクレ

投稿を歓迎します

英語教育に関する問題提起、実践報告、研究などの投稿をお待ちしております。締切は特にありませんが、本誌は今後、3月、5月、9月、2009年1月にそれぞれ発行の予定です。原稿到着の時点で掲載号を決めさせていただきます。規定は以下のとおりです。ご不明の点は編集部までお問い合わせください。

- ① 22字詰×72行以内(本文分量)
- ② 二重投稿はご遠慮ください。
- ③ 採用分には薄謝を進呈いたします。